

平成 30 年 6 月 20 日現在

機関番号：14303

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K16645

研究課題名(和文) Dr. Franz Stoedtner 作成ガラススライドの意義についての基礎的研究

研究課題名(英文) The basic study of significance of lantern slides by Dr. Franz Stoedtner

研究代表者

和田 積希 (WADA, Tsumiki)

京都工芸繊維大学・美術工芸資料館・特任助教

研究者番号：50746112

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,700,000 円

研究成果の概要(和文)：本研究では、フランツ・シュテットナー博士が1895年にベルリンに設立した「学術用映写研究所」の教育・研究用ガラススライドの製作・販売の実態をあきらかにし、同研究所が当時ヨーロッパの主要なメーカーであり、ドイツのほか、ハーバード大学やウィーン大学など多くの高等教育機関に教材を提供したことを確認した。

また、京都工芸繊維大学美術工芸資料館蔵のガラススライドが同大学の前身校のひとつ京都高等工芸学校で、当時最先端のデザインやヨーロッパの著名な美術、建築装飾に関する教材として、先駆的に購入・活用されていたことをあきらかにした。

研究成果の概要(英文)：In this study, I clarified the actual situation of the production and sale of lantern slides for education and research at the "Institut fuer wissenschaftliche Projection," established by Dr. Franz Stoedtner in Berlin in 1895. I confirmed that the institute was one of the main manufacturers in Europe at the time and that it provided teaching materials to many higher education institutions such as Harvard University, Vienna University, and other universities in Germany.

In addition, I clarified that Kyoto Institute of Technology Museum and Archives lantern slides were purchased as teaching materials at Kyoto Koto Kogei Gakko, the predecessor of the University, ahead of other educational institutions in Japan, and used efficiently for learning about the latest movements in design or famous art works and architectural decoration in Europe.

研究分野：日本美術史

キーワード：ガラススライド 美術史 図案教育史 Franz Stoedtner 京都高等工芸学校 近代京都 ドイツ 幻燈

1. 研究開始当初の背景

京都工芸繊維大学美術工芸資料館には、約1800枚のガラススライド(幻燈画)が収蔵されている。そのほとんどが同大学の前身校のひとつである京都高等工芸学校が設立された1902年から1920年代にかけて、同校の教材として購入されたものである。このうち約1000枚は、1895年、フランツ・シュテットナー博士(Dr. Franz Stoedtner, 1870-1946)によってドイツのベルリンに設立された「学術用映写研究所」(Institut für wissenschaftliche Projection)の製品であり、1902年9月、京都高等工芸学校初代校長の中澤岩太によって最初の100枚が納入されて以降、計3回にわたり購入されている。

ドイツでは、1890年代にはこうした複製写真が普及しつつあり、教育機関においても、美術史の研究や講義に利用できる多様な高品質なガラススライドが求められていた。ベルリン・フリードリヒ・ヴィルヘルム大学(現フンボルト大学ベルリン)の美術史教授であったヘルマン・グリムは、ガラススライドの重要性について認識し、美術館・博物館においてアーカイブ化をはかろうとした人物として知られているが、フランツ・シュテットナー博士はその弟子にあたり、ドイツで初めて学術的な利用を目的としたガラススライドの製作・販売を手がけた人物の一人である。

京都工芸繊維大学美術工芸資料館所蔵のガラススライドには、ヨーロッパの古代建築物から絵画、近代の工芸品や室内装飾にいたるまで、貴重な歴史・美術・デザイン資料が写っており、京都高等工芸学校図案科において、実物にかわる参考資料として、おもに図案(デザイン)教育に利用されていたと考えられる。

明治時代に入り近代化への対応を迫られるなかで、京都の美術・工芸界やその教育機関は、外国人技術者の招聘や留学生の派遣、外国製品の輸入や素材・技術の導入といったさまざまななかたちで、西洋文化を取り入れようとしていた。ガラススライドもおそらくこうした知の受容のひとつの手段であり、実物と比べて手軽で比較的安価であり、建築物など実物を持ってくることのできないあらゆるものを網羅できるという点で、教育現場において非常に有効的であったと考えられる。

さらに同研究所では、美術ジャンルに加え、民俗学、地理学、天文学、機械工学など実に多岐にわたるジャンルのガラススライドを研究や講義の資料として、シリーズ化して製作・販売していたことが分かっている。同研究所が製作したガラススライドは、その販売カタログとともにドイツ国内の大学や図書館、美術館をはじめ、欧米各地に収蔵されており、日本の他の大学でも購入し、利用されていた可能性が高い。

一方で文化財としての価値も高いガラススライドに写された被写体のデータを抽出し、保存することも重要である。ガラスス

ライドは、フィルムやデジタル画像にその役割をとって代わられて久しく、当時担った役割をきちんと検証されないまま、廃棄処分されている可能性も高い。ガラススライドそのものの保存・管理はもちろんのこと、デジタル技術向上の著しい現在において、その情報保存の在り方を考えることは、今後の美術・デザイン研究における資料の保存という意味でも必要である。

2. 研究の目的

本研究の目的は、フランツ・シュテットナー博士が製作・販売したガラススライドに焦点をあて、その製作・販売の実態をあきらかにして、その意義と歴史的位置を確認することである。そのうえで、このガラススライドが明治・大正時代の日本の高等教育機関において、美術・デザイン教育にどのように活用され、どのように効果をもたらしたのか確認する。美術・工芸、建築、図案などの本来実物資料を必要とする教育現場において、実物の代替物としてガラススライドが使用されていた実態を明らかにすることは、当時の日本の高等教育のあらたな側面を見出すきっかけとなる。また、ガラススライドを通じて、西洋文化が明治・大正時代の日本においてどのように受容されたのか、西洋文化受容の様態も明らかにしたいと考える。

3. 研究の方法

ドイツの図書館や大学に所蔵されている同研究所が発行した販売カタログや関連書籍を調査し、製作されたシリーズやその販売方法、販売先などをしらべ、同研究所におけるガラススライドの製作・販売の実態を明らかにする。さらに、販売カタログと京都工芸繊維大学美術工芸資料館所蔵の当該ガラススライドとの照合をおこなうとともに、京都高等工芸学校図案科の教育カリキュラムとも照らし合わせ、どのような目的で利用されていたのかを分析する。

つぎに、明治・大正時代において日本の高等教育機関で同種のを教材として活用した記録がないか調査する。具体的には、京都大学、京都市立芸術大学、東京大学、東京芸術大学、東京文化財研究所、東北大学、九州大学、北海道大学など京都工芸繊維大学同様に、創立年の早い高等教育機関および研究機関において、同種のガラススライドシリーズの購入実績やその現存状況、教育カリキュラムなどを調査し、美術・工芸、建築、図案などの本来実物資料を必要とする教育現場において、実物の代替物としてガラススライドが使用されていた実態をあきらかにする。

また、同研究所のアーカイブを管理しているドイツのマールブルク大学のBildarchiv Foto Marburgを調査し、資料の現存状況やその所蔵に至るまでの経緯を確認するとともに、同研究所における製作・販売の実態やその規模を確認する。

また、当該ガラススライドを所蔵している海外の高等教育機関についてもその利用の実態を調査する。

4. 研究成果

まず、ドイツ国立図書館 (Staatsbibliothek zu Berlin) において、フ란ツ・シュテットナー博士の「学術用映写研究所」が発行していた販売用のガラススライドカタログのうち、発行年度が古いものを中心に調査をおこなった。その結果、ギリシャ・ローマなど古代美術のスライドシリーズ、19世紀末の流行を反映する工芸・装飾に関するスライドシリーズ、イタリア美術のスライドシリーズなどが最初期に製作・販売され、次第にドイツ国内の美術や建築物へと目が向けられていったことが確認できた。また、販売時におけるガラススライドの分類や当時の販売価格、ガラススライドのサイズ、注文から納品までの手順などが判明し、販売の実態が一部あきらかになった。また、同研究所とベルリン工芸博物館付属図書館との関わりも判明した。

ついで、京都高等工芸学校時代に教材として購入された京都工芸繊維大学美術工芸資料館が所蔵する同研究所製のガラススライドの発注の実態や購入経路をあきらかにするため、閲覧することのできた販売カタログと当該ガラススライドの照合調査をおこなった。その結果、カタログに掲載されたスライド番号に該当するガラススライドが一定数あることが確認でき、カタログを通じて注文をおこなった可能性が浮上した一方、注文書や領収書等が現存していないこと、購入にあたって輸入業者が仲介していること、スライド番号のついていないガラススライドも同館には存在していることなどから、どのようなかたちで注文したか解明するには至らなかった。ただし、最初の納入品については、京都高等工芸学校初代校長の中澤岩太により、現地で選択・購入された可能性が浮上した。

続いて、3回にわたって購入された当該ガラススライドの被写体をそれぞれ精査し、あわせて京都高等工芸学校の教育カリキュラム等と照らし合わせる調査をおこなった。その結果、当時最先端のヨーロッパのデザインを反映した美術工芸品やインテリア、古代美術史を象徴するギリシャ、ローマ、エジプト、ペルシャ地域などにおける著名な建築物や彫刻作品、さらに教会などヨーロッパの建築物、とくにその装飾部分や図面と、回ごとにその内容がまとまっており、それぞれ明確な目的をもって購入されていたことがあきらかとなった。さらにその傾向は、その当時同校に勤務した教員の教育方針と密接に関わっていることが確認された。同校では、図案教育の参考資料として、多くの実物資料が購入されていたが、実物を見ることの難しい作品については、複製資料であるガラススライ

ドがその補助的役割を果たし、学生たちに様々な視覚的情報を与える重要な教材として利用されていたことが検証できた。また、関連調査として、京都高等工芸学校で同時期に購入された機織と紡績に関するオーストリア製のガラススライドについても分析をおこない、教育カリキュラムと照合し、その利用実態の一端をあきらかにした。

さらに、創立年度の早い日本の高等教育機関に、同研究所製のガラススライドの所蔵やその整理状況等を尋ね、同様の利用実態がないか検証を試みたが、同種のガラススライドの存在は、確認できなかった。回答を得られなかった館や未整理の館もあり、この調査は継続していく必要がある。

こうした状況をふまえ、国内調査はいったん保留とし、海外における同種のガラススライドの利用実態の調査に変更をした。調査先として、創立年度の早く、欧米の主要な大学であるドイツのハイデルベルク大学、オーストリアのウィーン大学、アメリカのハーバード大学を選択した。いずれの大学も京都工芸繊維大学とは比較にならない数のガラススライドを所蔵しており、同研究所製のガラススライドは、その一部でしかなかったが、ハイデルベルク大学においては、同研究所製のガラススライドがおもに1920~40年代に考古学分野での研究と教育に利用されていたこと、ハーバード大学、ウィーン大学においては、おもに美術史の研究と教育に利用されていたことを確認した。

さらに、同研究所のアーカイブを管理しているドイツのマールブルク大学のBildarchiv Foto Marburgにおいて、当時の管理簿やアルバムの一部を調査し、同研究所の規模や、当時どのようにネガやガラススライドの管理がおこなわれていたのか、その一端を知ることができた。また、マールブルク大学においても、20世紀初頭に日本が当該ガラススライドを購入していたという事実は把握されておらず、当時の日本とドイツにおける文化交流の在り方を解明する事例のひとつとして役立つ可能性がある。

製作されたネガやガラススライドの総数、海外の主要な高等教育機関で多数利用されていたという事実から、同研究所が当時のガラススライドの主要メーカーのひとつであることが確認できた。当初想定した日本の高等教育機関における当該ガラススライドの使用事例は発見できなかったが、欧米の高等教育機関においては、写真を用いたガラススライドの利用が主流となりつつあった20世紀初頭に、京都のデザイン業界を牽引する京都高等工芸学校において、ガラススライドという複製資料がヨーロッパのデザインや古代美術をまなぶための補助教材として導入されていたことは、同校の先駆性を示しており、ヨーロッパ留学を果たし、現地の実業学校や1900年のパリ万国博覧会の視察などを経て、海外事情に通じていた同校の教員陣が

いかに、世界を見据えて教育にあたっていたかを示す結果となった。

5. 主な発表論文等
(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 1 件)
和田積希、フランツ・シュテットナー博士作成ガラススライドの意義について 京都工芸繊維大学美術工芸資料館所蔵資料を中心に、デザイン理論、査読有、68 巻、2016、63-76

[学会発表](計 2 件)
和田積希、産業系教材としてのガラススライド 京都高等工芸学校の購入資料から、画像関連学会連合会 2016 年秋季大会、2016

和田積希、Dr. Franz Stoedtner 作成ガラススライドの意義について 20 世紀初頭の販売カタログから、意匠学会、2015

[図書](計 件)

[産業財産権]

出願状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

[その他]
ホームページ等

6. 研究組織
(1)研究代表者
和田積希 (WADA, Tsumiki)
京都工芸繊維大学・美術工芸資料館・特任助教
研究者番号：50746112

(2)研究分担者
()

研究者番号：

(3)連携研究者
()

研究者番号：

(4)研究協力者
()